法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

〈随想〉中国の青年たちと読んだ日本の小説

下沢, 勝井

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要

(巻 / Volume)
36

(開始ページ / Start Page)
174

(終了ページ / End Page)
176

(発行年 / Year)
1987-03-03

(URL)
https://doi.org/10.15002/00019505

中国の青年たちと読んだ日本の小説

下沢勝井

がある。 めることを通して、人間の生と死の問題を考えようとしている作品は、蜂やねずみやいもりやらの小動物の死や、死に至る動騒を見つ掌編「虫のいろいろ」がある。又、志賀直哉の「城 の 崎 に て」で「新臥している初老の男が、額のしわで蝿を捕えさわぐ尾崎一雄の病

定まった作品とみてほぼさしつかえなかろう。 これらは日本近代文学の中でのすぐれた心境小説として、評価の

大学者のおいも見せる。
中国の若い知性たちも、これもやはり小説でしょうか」といったがしてういった感想のすぐ後で、「なぜはえのようなきたない生とかしそういった感想のすぐ後で、「なぜはえのようなきたない 生しかしそういった感想のすぐ後で、「なぜはえのようなきたない 生とれて理解できたかは疑問ですがおもしろい見方です」などという。日本語の表現に関心をもち、興味をいだくようである。彼等は「どーの事の若い知性たちも、こうした日本人的感覚を通して描かれた、対している。

外国語を通して、その国の生活者たちのものの見方や感じ方を体

験してみるといったこうした準体験(文学的体験)には、その前になかは、考えてみると興味深い。

てはいない。むしろ彼等の眼は〈あなたが日本人で日本から来た教するといった、そういった作品の読み方には中国の青年たちは慣れた文学教育の可能性といいなおしてみてもいいと思うが)そこを我の国情における小説の読まれ方というか、文芸科学のあり方(そ我の国情における小説の読まれ方というか、文芸科学のあり方(そしかしきょう私がここで問題にしたいのは、それ以前の、現在の彼

ってているようにみえる。 学習ではなく指導書なしの見解は見解にはなり得ないと決めてしまません」ともいう。つまり彼等にとっては学習者相互の意見交換は外に解説書のひとつも見ていないのですから、発言のしようがありか〉といった不服そうな表情を見せる。又感想を求めても、「作品以かたの見解なり解釈なりを私たちの前に提示してみせな いの で す師であるならば、中国人の私たちに感想を求めるより前に、なぜあ

う場合、それはそれぞれの時代の古典を指している場合が多い。置づけて研究するといった機会は極めて少な い。「中国文学」と い中国では多くの場合、現代の中国文学を大学教育の講座の中に位

も現代の小説ではない。
小説を、特に現近代の小説を、文芸科学の対象としてとりあげる小説を、特に現近代の小説を、文芸科学の対象としてとりあげる小説を、特に現近代の小説を、文芸科学の対象としてとりあげる小説を、特に現近代の小説を、文芸科学の対象としてとりあげる小説を、地元では、

ているらしい。舞踊・映画などすべての文化・芸術現象の総体を指してそう呼ばれみれた、文化・芸術活動の総体をさし、作品も又絵画・彫刻・音楽・うやらそれは日本語の解釈とは異なり、むしろ文と芸との間に・を中国語で「文芸」とか「文芸活動」「文芸作品」という の は、ど

出「於稗官」 街談巷語道聴塗説者之所」造也」 ―漢書―)の考えが、又一方小説ということばも、文学というよりも稗史(「小説家流蓋

今も尾を引いていないとはいえないようにみえる。

なおな疑問のありかを教えてくれているように思う。 作家は、この小説の前には一体どのようなものを書いていた人たちょれようとしているのかもしれない。「志賀直哉や尾崎一雄と い うまれようとしているのかもしれない。「志賀直哉や尾崎一雄と い うまれようとしているのかもしれない。「志賀直哉や尾崎一雄と い うまれようとしているのかもしれない。「志賀直哉や尾崎一雄と い うまれようとしているのかもしれない。「志賀直哉や尾崎一雄と い うれようとしているわけではないが、しかし彼等の中には小説に対比さる国にも又あるわけではないが、しかし彼等の中には小説に対比さる本おな疑問のありかを教えてくれているように思う。

認識なのかもしれない。
日本の私小説の伝統が、時代の状況や動向から意識的に背を向け、名誉ある孤立を選びとることを通じて、限られた中での自立と醇化を守り抜き、そこに少数者にのみ通じ合えるたしかな人間存在の所度、あるいは集団と個人の関係は深刻である。若い彼等の古い頑迷なる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいなる部分への不服従の運動は、さまざまな対応を選ばせ、痛ましいを守り抜き、そこに少数者にのみ通じ合えるたしかな人間存在の所を守り抜き、そこに少数者にの状況や動向から意識的に背を向け、日本の私小説の伝統が、時代の状況や動向から意識的に背を向け、

れの国と時代における文学者の条件といいなおしても私にはさしつしかし又それにしても、民衆と文芸運動の関係――それをそれぞ

その距離が大きすぎる。たとえば彼等の国の場合、憤死した屈原 かえないのだが うに、革命後も時代の変動への露頭は、まずいわゆる文芸活動家へ 生き方の中に、日本とは異質のそれをみる。革命前もそうであるよ ひそみにまでさかのぼらなくとも、私たちには魯迅や田漢や巴金の 的文学者の高揚や憂患と別にはなかった。国の命運と文学者の運命 行なわれてきた。こうして時代の幸運も不幸も、文学者の、特に指導 の指標やあるいは指弾を前触れとして、それに続いて変革や変更が は、中国の場合は今もきわだった緊張関係の中にある。もちろん中国 老の男の額で泡を食うはえを・眼をつりあげて見上げている男や、幕 の文学活動がそうした面だけではないが、たとえば先の病臥する初 りを見ている中年の男とは、 れなずむ初秋の清流の中で、一瞬尾をつりあげて、体を沈ませるいも -中国と日本の文学活動の社会的意味や意義 異なる世界の住人のように思われる。

して彼等の前には存在していた。』とは、ヨーロッパの近代史を学習 の人たちと生活してみて、このことばは同時に中国大陸の歴史と風 歴史は変革さるべきものとして、自然は征服されるべきものと 私には、 若い歴史の教師から教えられた、今も私が記憶してい そのままあてはめられることばであると感じさせられ わずか二年間の体験にすぎなかったが、中国

日本ではあまり考えられないが、中国の場合は家内に二重三重の扉 を建てる場合に、まずその家を囲う塀から造り出すといった習慣は 日本と中国が同文同種とか、一衣帯水の間などと修飾されたとし 両国の歴史と環境とは根源的に異なる。たとえば、一軒の家

> その後に同族の満州族を計画的に入居させて都づくりをはたし、王 ぐらすといった習慣が今も守られている。三百年を耐えてきた清 をつけて、その外に重い煉瓦塀を通行人の背丈以上の高さにはりめ げたような思想は、日本のどのような都遷りのときにもなかった。 城内にはひとにぎりの土も残さず、石と煉瓦で壮大な城郭を築きあ 防ぎ、すくなくとも隣国の朝鮮半島に住む民族が歴史的に味わわさ でに大陸とをへだてる海があって、天与の海が異民族からの襲来を 発想も日本人のものではない。ともかく日本では長城の代りに、す 重畳たる山頂をつなげて、万里の長城を築きあげようとするような の言語圏に住む同族が圧倒的に多いこの列島の民族が培ってきたも した季節感をもち、温暖で湿潤なこれも天与の自然に恵まれ、 れてきたような辛苦は、われわれの歴史の中にはない。はっきりと 中で培われてきた多民族国家からなる文化や習慣も当然に異なる。 のと、ユーラシア大陸東部の、広大ではあるがきびしい風土と荒野の させられてきたことは、私には全く当然な結論である、中国も又外 国であり、外国人であったという実感を通しての確認にすぎなかっ ここでの二年間は、私は日本の文学を読むというよりは、 の方が私には刺激的で楽しかったからである。 かに生活者としての感想を語り合うといった対し方をしてきた。そ 歴史が、北京城内の先住の漢民族を、すべて城壁外に移住させ、 (付記) 一九八四年三月~一九八六年七月まで、 中国の若い読者たちと、日本の小説を読みあうことを通して発見 しかしこの確認を私はこれからも大切にしていきたい。 私は中国